

「范鯁兒雙鏡重圓」の創作方法

小松 建男

I 前 言

「三言」所収の小説については、原作とされる作品が既にかなり明らかになっている。このような小説については、原作と小説の比較は、作者がいかなる手法を用いて小説を創作したのかを知る上で有効な方法と言えるであろう。但し作者は、資料にさまざまな操作を行って小説に統一を与えているのであるから、比較も異同や変更を個々に指摘するのではなく、作者が創作に際し行った操作に現れた特色や、そこに一貫している傾向をこそ明らかにすべきである。「三言」所収の小説の中には、原作の本文の語句をそのまま踏襲していたり、あるいは口語的な文に改めて使用したりしている箇所を指摘し得る作品も有る。これらは原作を直接素材として利用していると考えられ（原作と指摘された作品すべてが、素材として直接利用されているかどうかは検討の必要が有るだろう）、比較によって作者の行った操作も指摘し易い。そこで今回は、このような作品の中から『警世通言』巻12「范鯁兒雙鏡重圓」（警12と略称）を例にとって、作者の創作の方法を見てみたい。

II 范希周の分析

警12は、徐信の話を入話とし、范希周の話为正話とする小説であり、入話は『夷堅志』に、正話は、『撫青雜説』に原作が収められている¹⁾。警12の冒頭の詞は、明の瞿佑の作として『西湖遊覧志餘』に引用されているので²⁾、警12は明代に成立したと考えられる。但し警12は、明以前に成立した二つの作品（徐信と范希周）を併合して作られたということも考えられるので、警12の成立が明代であってもそれが直ちに入話と正話の成立年代が明代であることを証明するとは限らない。そこで、警12を一つの作品としてではなく入話と正話を別の作品として扱い、今回はこのうち正話にあたる范希周の話を取り上げることにする。

以下に本文を引用する際どの場面の文章か指定する必要もあるので、先に警

12のストーリーを主要な七つの部分に分割し、それぞれに記号を付しておくことにしたい。警12は、まず導入部で呂忠翊の福州赴任(a)と范汝為を首領とする反乱に心ならずも范没為の一族である范希周も巻き込まれたこと(b)が語られる。その次に赴任途中で呂が娘の呂順哥を范汝為の軍にさらわれ、再び取り戻すまでが、紹興元年の春(c)と十二月(d)に范希周の家での范と呂順哥の会話を中心に語られ、最後に呂順哥が夫の范希周と再会団円するまでが紹興二年頃(e)、紹興十二年のある日(f)とその半年後(g)に呂忠翊の家で、各登場人物達の会話を中心に語られる。

なお警12と『撫青雜説』の原作（以下単に原作と称する）を比較すると、警12が范希周と呂順哥夫婦が別離の際に鏡を二つに割ってお互いに一方を持ち後日再会の日の証拠としたという以外は両者の設定に大きな違いがないので、原作の場面の指定も、この警12の区分をそのまま利用することにする³⁾。

a ストーリー

まず、話の展開に関して、作者は二つのことを行っている。一は事実関係の誤りを正し出来事を時間順に配列し直すなど、現実の世界に近づけようとする努力であり、二は人間の行動を合理化することである。

原作では、歴史上の出来事でも日時を誤っていることがあるが、警12はこれを正確な日時に直している。范汝為討伐について、警12では、dの場面の直前に韓世忠が紹興元年冬に討伐を命ぜられたとある。そしてdの最後は「這是紹興元年冬十二月内の說話」と締めくくられ、その直後に「到紹興二年春正月」で始まる落城の記述が続く。一方原作の該当箇所を見ると、討伐命令は警12と同じ紹興元年に出たとあるが、落城については十日ほどかかったと期間を言うばかりで、いつなのかは明言していない。この事件は、gの場面で范が呂順哥と別れ別れになった後の経緯を語る台詞中でも語られている。原作の該当箇所を見ると、建州城が落ち夫婦生き別れになった事を、范は「是冬城破、夫妻各分散走逃」と言っており年を越していない。警12では台詞を「逾年城破、夫妻各分逃走」とdの場面前後の記述と対応するように、年を越したと改めている。史書によれば警12の記述の方が史実にかなっている⁴⁾。また、范はこの台詞の中で岳飛の楊幺討伐に参加したとも言っているが、ここでも、原作では討伐の年が記載されていないのを、警12は紹興五年という年号を新たに挿入している⁵⁾。

次に登場人物の呼称も、その時点での肩書にふさわしいものに変更している。上記の台詞の中で岳飛のことを原作では、「岳承宣」と呼んでいたのを、「岳少

保」と改めている。岳飛は楊玄討伐の功により檢校少保になっているので、范が語っている時点での呼称は、警12の「岳少保」の方が正しい⁶⁾。歴史上の人物ではないが呂忠翽についても、原作では、呂忠翽のことを一貫して「呂監」（最初の官職が、監税官であった）と呼んでいたのを、警12では彼が監税官である時は「呂忠翽」、都提轄に任命された後は「呂提轄」、討伐による功賞を受けた（どのような官職についてのかは記されていない）後は、「呂公」と呼称を変えている。但しこれには不統一が一箇所ある。後に引用する例7に「呂公在福州為監税官」とあるが、この時彼はまだ監税官なので他の箇所とあわせれば、「呂忠翽」のはずである⁷⁾。

原作で過去の出来事を後から遡って述べている箇所の本文は、発生した時点に移動させている。これによって、話の展開を時間の順序と一致させると同時に、読者が後から語られる出来事を既に語られた内容から予想することも可能にしている。

再びgの范の台詞。原作の該当箇所では、彼が官軍に投降した時、次の例1のように韓世忠率いる討伐軍が反乱軍を壊滅させた時、韓が黃旗をたて招安したと范は言っている。

1 城破舉黃旗招安。

警12は、例1に該当する台詞をここから削除し、例2のように実際に招安の行われた時点、dとeの間の叙述の文章に転用した。

2 韓公豎黃旗招安餘黨。只有范氏一門不赦。范氏宗族一半死於亂軍之中，一半被大軍擒獲，獻俘臨安。

また、同じ台詞中に、その後范が楊玄討伐に功績のあったことを原作は、

3 某以南人便水，常前鋒。每戰，某尤盡力。

と述べている。警12を見ると、これが次のようにより詳しくなっている。

4 小將南人，幼通水性，能伏三晝夜，所以有「范鰓兒」之號。岳少保親選小將為前鋒，每戰當先，遂平玄賊。

作者は、例4のみでは、作品の終り近くに突然主人公の新たな一面が紹介されることになり、唐突であると考えたらしく、更に警12で范を初めて紹介するbの場面に、例5を補っている（この例5は原作に対応するものがない⁸⁾）

5 自小習得一件本事，能識水性，伏得在水底三、四晝夜，因此起個異名喚做「范鰓兒」。

次に呂忠翽は、韓世忠の討伐軍に参加し、dとeの場面の間で自殺しようとしている娘と出会うのであるが、彼の討伐軍参加の経緯について、原作では娘

と再会する直前の箇所、次のように説明している。

6 先是，呂監與韓郡王有舊。韓過州郡，呂監爲提轄官，同到建州。⁹⁾

警12を見ると、gとeの間に例6に対応する文章はない。警12では、これより前のcとdの場面の間に、朝廷が韓世忠に范汝為討伐を命じたという、原作にはない記述が追加されており、例6に対応する文章はここに移されている。

7 原來韓公與呂忠翊在東京有舊，（中略）知呂公在福州爲監稅官，必知閩中人情土俗。其時將帥專征的都帶有空頭敕，遇有地方人才，聽憑填敕委用。韓公遂用呂忠翊爲軍中都提轄，同駐建州城下，指麾攻圍之事。

また作者は登場人物の行動も合理化しようとして、度々原作の本文に手を加えている。

前に引用した、例7の中の「必知閩中……填敕委用」は、原作に対応するものがなく、警12の増補。作者は、この増補により呂が土地の人情風俗を知っていたことと、当時は現地採用ができたことを説明し、呂の任用が単に韓世忠と知合いだったから（これは原作の段階でも既に指摘されている）ではなく、正当な理由もありかつ制度上も可能であったと、この任用の妥当性をくどいほど強調している。警12の冒頭にも、呂忠翊が福州に赴任する気になったのかという説明（「一來福州憑山負海，東南都會，富庶之邦。二來中原多事，可以避難」）が新たに増補されている。

また呂忠翊が、自殺しようとしていた娘呂順哥と再会する箇所。原作では父娘が再会した時の叙述は、

8 良久方蘇，具言其所以，父子相見，且悲且喜。

となっている。作者は、やっと再会した親子が、話をしてから「且悲且喜」となるというよりは、なにはともあれ二人で「且悲且喜」となる方が人間の行動としては理に適っていると考え、例9のように原作の「良久方蘇」と、「具言其所以」に相当する文章の間に、「父子重逢，且悲且喜」という文を後ろから移している。

9 那順哥死去重甦，半晌方能言語。父子重逢，且悲且喜。順哥將賊兵擄劫（中略）述了一遍。

次に示すのは、fの場面。呂順哥が、賀承信を見て、范希周とよく似ていると思い、あれは誰かと父に尋ねる箇所。原作（例10）では、彼女がどこでどのように賀を見たのか何も説明がない。

10 呂監延于廳上。既去，呂氏謂呂監曰（後略）

そこで作者は、女性の場合もっとも可能性の高そうな、「在後堂中竊窺」とい

う説明を補なっている（例11）。

- 11 呂公延於廳上，問其地方之事。敘話良久方去。順哥在後堂中竊窺，等呂公入衙，問道（後略）

賀承信と范希周が同一人物らしいので確かめてほしいと娘に頼まれた呂忠翊は、gの場面で、原作は賀に次のように尋ねる（例12）。

- 12 因飲酒熟，問其鄉貫出身。賀羞愧，向呂監曰（後略）

この直後に、范は反乱の首謀者の一族と分かることを恐れて偽名を使っていると言っている。偽名をつかって生きているような人間が、このように他人に簡単に素性を明かすと言うことは、常識的には考えられない。そこで作者は、范がためらいながらも素性を明かすまでの過程を、次のように（例13）補足している。

- 13 飲酒中間，呂公問其鄉貫出身。承信言語支吾，似有羞愧之色，呂公道：“猷兒非足下別號乎？老夫已盡知矣。但說無妨也。”承信求呂公屏去左右，即忙下跪，口稱“死罪。”（後略）

b 登場人物

次に、作者は善悪を非常に厳格に区別し、曖昧さを残さない。

まず、作者は、反乱の首謀者（范汝為）とその一族を、それ以外の反乱参加者と区別し、後者は投降を許されたが、前者には許さなかったとしている（例2）。既に述べたように、これに該当する文は原作に見あたらない。

原作を見ると、范氏一族が、討伐後どうなったのかについて、僅かにgの場面で范に「一族は助からないと思った」と言わせているに過ぎない（例14）。

- 14 恐以賊之宗族一併誅夷，遂改姓賀，出就招安。

作者は、この「賊之宗族一併誅夷」が事実であるように書き換え（例15）している¹⁰⁾。

- 15 賊之宗族，盡劫誅戮。小將因平好行方便，有人救護。遂改姓名爲賀承信，出就招安。

作者は、この例15を更に二箇所転用している。その一が例2であり、二はfの場面の呂忠翊の台詞中に見える（例16）。この箇所、原作を見ると呂は范が乱軍の中で死んだ推測している（例17）だけであったのを、范氏一族に対する厳しい処分にわざわざ変えている。

- 16 凡姓范的都不赦，只有枉死，那有枉活？

- 17 汝范家子死于亂兵，骨以朽矣。

史書を見ても、范氏一族とその他の反乱参加者を区別したとは書かれていない¹¹⁾。話の展開については一々原作の史実にあわない箇所を正していた作者であるが、ここでは史実よりも、道徳的価値の方を優先させている。

一方主人公達は、冷静で言動が倫理的かつ合理的な人間として理想化されている。

まず呂順哥については、原作でも既に充分貞節な女性として描かれていたもので、これをより詳しくする程度ですんでいる。e の場面から一例を挙げると、両親から再婚するように言われた彼女の返事の台詞の最後の部分は、原作では次のようになっている。

18 兒今且奉道在家，作老女奉事二親，亦多少快活，何必嫁也？

警12では、次のように一生両親のもとで暮らすと言った後に、原作には無い、「若必欲孩兒改嫁」以下、死んでも節を守るという言葉を付け加えている。

19 孩兒如今情願奉道在家，侍養二親，便終身守寡，死而不怨。若必欲孩兒改嫁，不如容孩兒自盡，不失爲完節之婦。

范希周は、范汝為の一族であり、賊軍の中にいたことになっているので、范希周のみを免責にする為には、范氏一族から彼を引き離す納得のいく説明が必要であった。

原作にも范を免責にする為の文が、d の場面の范の台詞（例20）とe の場面の呂順哥の台詞（例22）の二箇所にある（例21, 23はこれらに対応する警12の台詞）。

20 我陷在賊中，雖非本心，無以自明。

21 我陷在賊中，原非本意，今無計自明，玉石俱焚，已付之於命了。

22 彼名雖曰賊，其實君子人也。彼是讀書人，但爲其宗人所逼，不得已而從之。他在賊中常與人作方便，若有天理，其人必不死。

23 范家郎君，本是讀書君子，爲族人所逼，實非得已。他雖在賊中，每行方便，不做傷天理的事。倘若天公有眼，此人必脫虎口。

作者は、ここでも主に例22に類似した文を各所に追加することで、范の免責を無理のないものにしようとしている。話のはじめから順に見て行くと、まず范が初めて登場する際の説明。原作（例24）は、「陷在賊中，不能自脱」と簡単な状況説明しかないが、警12（例25）は、例22を参照して生きるためにやむなく従ったが、専ら人助けをして略奪に加わらなと弁解し、その為、役立たずと笑われたとまで言っている。

24 本土人，三入上舍間，在學校曾試中上，亦陷在賊中，不能自脱。

25 原是讀書君子，功名未就，被范汝爲所逼，凡族人不肯從他爲亂者，先將斬首示衆，希周貪了性命，不得已而從之。雖在賊中專以方便救人爲務，不做劫掠勾當。（後略）是笑他無用的意思。

次に、呂順哥がさらわれた場面を原作で読むと、略奪軍のなかに范もいたらしく読め、このままでは例25の「不做劫掠勾當」と矛盾するので、范はさらわれた呂を途中で見つけたと設定を変えている。

これに続くcの場面で、范は「本心」を呂に語る（該当する文が原作にはない）。

26 我本非反賊，被人逼迫在此。他日受了朝廷招安，仍做良民。小娘子若不棄卑末，結爲眷屬，三年有幸。

更に、gの場面で、范に「小將因平昔好行方便，有人救護」と言わせ（例15），最後は、後人の批評として范を評価する次の文（例27）でこの小説を締めくくっている。

27 范鰥兒在逆黨中涅而不淄，好行方便，救了許多人性命，今日死里逃生，夫妻再合，乃陰德積善之報也。

呂忠翊は、原作を見る限り平凡な人物であるが、警12では呂順哥の父親としてふさわしい倫理的、合理的な人物に改められている。まず、娘をさらわれた後の反応。原作（例28）のままでは、情けないとおもったらしく、警12は例29のように改めている。

28 是時賊徒正盛，呂監不敢陳理，委之而去。

29 無處尋覓，嗟嘆了一回，只索赴任去了。

次にeの場面。再婚を承諾しない娘呂順哥に対する彼の台詞。原作では、武官とならまだなんとかなると現実的な判断を述べている箇所（例30）を、警12は「反賊」との結婚はやむを得ない状況だったという理論的に説得しようとする言葉と差し替えている（例31）。

30 今嫁士人，文官未可知，武官可必有也。

31 好人家女兒，嫁了反賊，一時無奈。

原作は、この後娘の反論（一部は例22として引用）でeの場面を終わるが、警12は、娘の反論の後に、

32 呂公見他說出一班道理，也不去逼他了。

という一文を挿入し、彼はどうしても節を守るという娘の言葉に道理を認めたので、それ以上言えなかったことにしている。

最後に、范と呂順哥が再会した後、原作の呂忠翊は、任期が終ると回り道を

して范の任地へ行き、娘と一緒にいる范の任期が開けるのを待って、都へ帰った事になっている。官吏でありながら、任期が切れてすぐ都へ戻らず、娘のところへ行くというのでは、けじめがつかないと作者は考えたらしく、警12では范が任期が終り呂順哥をつれて都へ戻る途中呂忠翊の任地にたちよったことにしている。

c 自律性の尊重

警12を創作するにあたり作者が行った操作をこれまで見てきたが、これらに共通するのは小説を構成する各要素の自律性を尊重しようとする姿勢である。作者は各要素を各々に固有の規則や規範に従わせ、作者の都合で恣意的な設定をするといった外部からの干渉を避けようとしている。但し各要素が自律的で他者の影響も支配も受けないということは、作者が読者の興味を引くためにこれらの間を調整し効果的に運用することもないということでもある。このため警12は整然と秩序だっているが、冷静すぎて盛り上りに欠けるという印象が強い。

まず、話の展開は時間と因果の法則に従う。時間の順序通りに語っていることを効果的に利用すれば、次に何が起こるか分からないという状況を設定し緊迫感や意外感を読者に抱かせることも可能である。ところが警12は、一方で因果関係を厳密に設定しているために、むしろ対象から距離を置いて淡々と叙述しているという印象を与える。例えば呂順哥と父親の再会を、警12のように出来事の発生した順に全て語るのではなく、話本によく見られるように呂順哥がどうなっているか知らない父親の視点から、あるいはその逆から記述すれば、思いがけぬ再会をもっと効果的に描けたはずである。

次に、主人公達の行動は常に倫理的、合理的である。中には呂忠翊の福州赴任や韓世忠による都提轄任用（例7）のように、これが作者による恣意的設定でないことをくどいまでに説明しているような、いささか行き過ぎと思われる例もあった。主人公達は発言まで理論的であるので（ついでに言えば警12ではなぜか登場人物は外面から観察されるのみで心理描写が無い）、常に冷静という印象を受けるが、時にその場面にふさわしくないとと思われることが有る。例えば、gの場面で呂順哥は、父に范かどうか確かめてくれるようにたのむが、原作の「乃情懇其父」に相当する箇所を警12は「とても范に似ているので、酒でもてなし彼のあだ名（鰕兒）と、二人で分け持っている鏡のものを持ち出して確かめてくれ」と確認の手順から方法まで含んだ台詞に置き換えられているが、これでは冷静すぎて「夫かどうか何とか確認したい」という切なる思いは

伝わりにくい。

最後に、この特色は、主題設定の仕方にも現れている。原作は混乱した社会を生きた夫婦の生き別れから思わぬ再会までの苦労の話である。作者は、これを夫婦を人間の考えの及ばぬ運命に翻弄される受動的な人間とは考えず、困難な状況下でも自らの倫理的規範を守った人間として理想化している（作者は、冒頭でこの話を「夫妻節」と評価している）。但し主人公達が自律的人物であるとすれば、彼らにとって倫理的規範は外から押し付けられたものではなく、本来自分の心中に備わっているはずであるので、范夫婦がこの規範に従って行動するのは自然なことであり、規範を守るべきか現実と妥協すべきかという心理的な葛藤や苦悩は登場すべき場所がない。しかも既に見たように主人公達は常に冷静でもあるので、彼らが困難に直面しているにもかかわらず、劇的と言うほどの盛り上りを見せることがない。

Ⅲ 「三言」の他の作品との関係

ここまで専ら警12について、作者が創作にあたり行った操作と傾向を見てきた。今後他の「三言」の作品についても原作との関係、本文操作の方法から分析を行えば、その特色による分類が可能になる。次にこのように抽出された特色と分類を、原作の明らかでない作品にも当てはめてみるならば、「三言」の各作品間に、これまで予想していなかった類縁関係が明らかになることが期待される。更に、「三言」から「二拍」など個人の著述であることが分かっている作品集にも分析の対象を拡げれば、明後期の短編小説の特色がより明らかになるであろう。いま取り敢えず警12の操作や特色と類似に気づいた小説を挙げると、次のようなものがある。

まず『稗史彙編』との関係。原作「范希周」は、『撫青雜説』のほかに『稗史彙編』にも収められているが、警12は『稗史彙編』の本文の文字に一致することの方が多い。同様のことが言えるのは、『古今小説』巻28「李秀卿義結黃貞女」（古28）。古28の原作も、複数の書物に収められているが、古28の本文に最も近いものは、『情史』を除けば『稗史彙編』である¹²⁾。

次に、手法について見ると、『古今小説』巻17「単符郎全州佳偶」（古17）は、原作の年号の誤りを正す、時間順に配列し直す、主人公の呼称をその時々肩書に合わせて改めるなど警12とよく似ている¹³⁾。古17は更に原作（「単飛英」）が『撫青雜説』にあることも警12と同じであり、この二編はかなり近い関係（同じ作者？）にあると考えられる。また、時間順に配列し直すという操作は

『醒世恒言』巻26「薛録事魚服証仙」(原作は『続玄怪録』の「薛偉」)にも見られる¹⁴⁾。次に馮が編纂した書物の中でも、「三言」の原作を多く収めている『情史』に目を向けると「三言」と類似の手法が見られる。まず、警12の例4などのように主人公の説明が後に在ったのを、はじめに移すことは、『情史』の「地祇」、「丹客」などにも見られる。「地祇」では文末にあった主人公の名前を始めの方に移動させているが¹⁵⁾、古17もこれと全く同じ操作をしている。また、警12以外では『醒世恒言』巻25「独孤生帰途鬧夢」(醒25)も、『情史』と同じ操作をしている。醒25は「独孤退叔」(『太平広記』巻281)を軸にしたがらも「張生」(『太平広記』巻282)を参照し両者の本文から小説の本文を合成している¹⁶⁾。例えば妻の白氏が無理やり酒の相手させられ困っている場面の台詞を見ると、はじめは「独孤退叔」に依っているが、その後は「張生」の台詞を混入している。『情史』では「干宝」(巻10)が「干宝家奴」(『太平広記』巻375)と「干宝父妾」(『搜神後記』巻4)の本文を合成している。また「鶯鶯」(『情史』巻14)では、「鶯鶯伝」(『太平広記』巻488)の本文に、「伝奇弁証」から、張生の「春詞」二首を持ち込んでいる¹⁷⁾。

ところで警12の正話である范希周の話は一般に、話本とされることが多いが、これまで警12との類似を指摘した小説は、古17以下みな擬話本と考えられている。さらに付け加えると『醒世恒言』巻19「白玉娘忍苦成夫」は、冒頭で「義夫節婦」の話と規定され、警12同様に「破鏡重圓」¹⁸⁾の趣向であるが、これも擬話本であり、警12の正話も成立はそれほど古い作品ではないのではないかと考えられる。

ここで原作との比較を離れ、「三言」全体を見渡してみると、前節までに指摘した警12の特色は、確かに擬話本とされる小説に見られるものである。或は警12が排除しようとしたものが、話本の特色となっている。つまり、話本は警12が避けようとした偶然や運命のいたずらを利用し話のおもしろさで読者を引き付けようとするものが多く、擬話本は、警12同様に話を分析的、合理的に叙述し、そうなって当然あるいは自然であると読者を納得させようと努めることが多い。擬話本においては、この傾向を極端にして、一見不可能に見えることを、いかに可能にするかに重点を置いた小説も見られる。例えば、『醒世恒言』巻8「喬太守亂點鴛鴦譜」は、男を花嫁の代わりに嫁がせて、どのように気づかれないようにするかに、『醒世恒言』巻28「呉衙内鄰舟赴約」は、女性の部屋に男をどのようにして隠しておくかに興味を中心を置いた話である。また警12は、言わば困難な状況下で人間の価値が試されるという設定であるが、これ

も擬話本に多い。例えば『警世通言』巻32「杜十娘怒沈百宝箱」は、范希周とは逆に困難を前にして、つまりぬ男が正体を見せてしまい、その報いを受けた話。

また、各構成要素の自律性を尊重しようとする警12の傾向は、詩の「礼儀」（形式・規則）は外部ではなく内部にあるという李卓吾の、またこの世の現象は因果や前後左右などと言った関係に依って成り立っていると言う金聖嘆の文学論ともその姿勢に於て共通するところが有り¹⁹⁾、この点から見ても、警12は、明後期の社会の中に位置付けて理解すべき小説と考えられる。

1993年4月18日 改稿

注

- 1) 「范猷兒雙鏡重圓」の原作については、小川陽一編著『三言二拍本事論考集成』（新典社 1981）p.118。
- 2) 馬幼垣「京本通俗小説各篇の年代及其眞僞問題」（『中國小説史集稿』時報出版社 1980）p.27。
- 3) 范希周の引用は、涵芬樓本『説郭』巻37（『説郭三種』上海古籍出版社 1988所収）に収められている『撫青雜説』を使用する。范希周の話はこの他に『稗史彙編』巻43「夫婦守節義」（新興書局 刊年不記、p.666）、『情史』巻1「范希周」（春风文艺出版社 1986、p.1）にも見られる。この二本の本文はほぼ同じであり、『撫青雜説』とは文字が若干異なる。『撫青雜説』は宛委山堂本『説郭』巻18（『説郭三種』上海古籍出版社 1988所収）にも収められているが、これも涵芬樓本『説郭』と若干文字が異なる。
- 4) 『建炎以來繫年要録』巻51（文海出版社 1980、p.1743）など。原作の時期を改めたものとしては、この他に史実に見えない事柄であるが、呂忠翥の福州行きについて、原作は紹興元年なのを、警12は建炎四年と改めている例がある。
なお、范汝為は原作では「自縊」したとあるが、警12は「自焚」したと改めている。いま何竹淇編『两宋农民战争史料汇编』（中华书局 1976）下編・第一分冊に集められている史料を見る限りでは、史書で「自縊」とあるのは『宋史会要』と『中興小紀』、他は皆「自焚」となっている。作者の利用した史書が「自焚」であった為に「自縊」を史実と合わないと考え書き換えたのであろう。
- 5) 年号の挿入は、この他に范汝為が乱を起こした年でも行われている。但し原作では、作品の冒頭に「建炎庚戌歲，建州兇賊范汝為，因飢荒嘯聚至十餘萬」とある。
- 6) 『三朝北盟会編』巻168（上海古籍出版社 1987、p.1216）などによれば、紹興五年九月に岳飛は、檢校少保になっている。
- 7) 呼称の不統一は韓世忠についても見られる。原作では、はじめの二回は、「韓郡王」、あと一回は「韓帥」と呼んでいた。警12は、次の二箇所を除いて皆「韓公」と呼んで

いる。「韓公」でないのは、一番はじめの「韓蕲王」（死後追贈されたもの）と、最後の「韓元帥」で、これらは原作の呼び方に近くなっている。

- 8) 呂順哥についても、同様の例がある。警12ではbとcの間、最初に順哥を呂忠翊の娘として紹介する箇所、次のように述べている。

再說呂忠翊有個女兒，小名順哥，年方二八，生得容顏清麗，情性溫柔。

原作は、この箇所にこれに該当する文章を欠いているが、そのかわり「容顏清麗，情性溫柔」は、彼女と范希周がはじめて出会う、警12のcに該当する場面の文中に見える次の文（『稗史彙編』・『情史』は「性情」が「情性」になっている）を利用したものである。

見其爲宦家女，又顏色清麗，性情和柔。

- 9) 涵芬樓本『說郛』、『稗史彙編』・『情史』は皆「先是，呂監與韓郡王有舊。韓過福州，辟呂監爲提轄官，同到建州」となっている。
- 10) 原作では、范汝為の招安は、二回有る。初めは、名目だけの招安であり、殺人がないだけで、略奪その他はもとのままであったとされている。呂順哥がさらわれたのは、この時である。二度目が、韓世忠に討伐されて范汝為が自殺した後の招安。警12は、一度目を削除し、招安は一回しかないことになっている。これは朝廷が、賊軍を打ち破って招安することはあっても、名目だけの招安をするはずがないと考えて削除されたとも考えられるが、『稗史彙編』・『情史』も同じ箇所を削除しているので、或は警12の作者は、『稗史彙編』を利用して招安が二回有ることを知らなかったということも考えられる。なお明末に金聖歎は、招安以後を削った『水滸伝』を出版している。名目的な招安を否定する金のこのような処理は、警12や『稗史彙編』の招安処理と共通するところが有るように思われる。
- 11) 何竹淇の前掲書を見る限りでは、大半の史料が韓世忠は建州の民を全員殺そうとしたが、李綱の建言により「獨取附賊者誅之」としている。ただ『宋史』巻27「高宗本紀四」（中華書局 1977, p.495）の記述が他と異なり「斬其二弟，餘黨悉平」となっている。しかしいずれを取っても范氏一門のみを他と区別するという警12の記述とは一致しない。
- 12) 小松建男『『情史』の編集方法(1)』（『文芸言語研究』文芸編22 1992）pp.23-46。
- 13) 例えば、原作に宣和丙午とあるが、古17は宣和七年と改めている。宣和は七年（乙巳）までしかなく、その翌年（丙午）は靖康元年にあたる。
- 14) 赵景深「『醒世恒言』的来源和影响」（《中国小说丛考》齐鲁书店 1980, pp.344-356）、また内田道夫「伝統と敷演」（『中国小説研究』評論社 1977, p.276-p.289）に、より詳しい分析が見られる。
- 15) 小松前掲論文。
- 16) 赵景深前掲論文。
- 17) 小松前掲論文。
- 18) 丁乃通著・孟慧英等译『中国民间故事类型索引』（春风文艺出版社 1983 : Ting Naitung, *A Type Index of Chinese Folktales*, FFC, no. 223, 1978 Helsinki) p.92,

また丁乃通著・郑建成等译『中国民间故事类型索引』（中国民间文艺出版社 1986）p. 271, 話型番号881A*。

- 19) 小松建男「李卓吾と金聖嘆」（横山伊勢雄・伊藤虎丸編『中国の文学論』汲古書院 1987）pp. 205-214。

（筑波大学）